



魔男耕太郎

色使いの魔法使い



魔男耕太郎

4

色使いの魔法使い

ぶんろく

Bunroku's Factory

最近の魔男耕太郎さんは暇です。

いつもなら、三日と開けずに「ひーひー」言いながら魔男さんの住む、坂の上の檜の木屋敷まで依頼状を届けにくる、郵便配達もとんと姿を見せません。

なぜかと申しますと、魔法が効かないという評判が立ってしまったからです。秘書を自任しております私、魔男さんの部屋の居候、ネズミの文蔵としても、一宿一飯の恩義に報いるためになんとかしてさしあげたいのですが――。

「耕太郎お、お客さんこないね」

魔男の助手、妖精の光子が言った。今日の彼女は、梅の花を散らした紅縮緬地の着物に黒地に手毬を刺繍した帯を締めている。ほっくりと官能的な唇は紅をさしたように鮮やかだ。真綿の暖かさを持った白い肌、柔らかく通った鼻筋。物静かだがもの問いたげな一重の瞳。百人が百人、美しいという非の打ちどころのな

いたたずまいだ。あえて難を探すとするなら気の強そうに張りのある小鼻ぐらいだ。

「ま、こういうときもあるさ」

魔男は面白くなさそうに答える。こちらは、牛乳ビンの底のように厚いレンズのメガネに半白のぼさぼさ頭、どこからみても冴えない中年男。街ですれ違っても、いや、たとえ差し向かいで一時間話したとしても、百人が百人、メガネ以外は何も覚えていないようなたたずまいである。職業は魔法使いですと言ったら、笑われるか、気味悪がられるかのどちらかしかない。最悪でも警察を呼ばれるのがおちだろう。

開け放った窓から、春風といっしょに、魔男が住むアパート「ドーナツ荘」の庭の檜の木に作られているツリーハウスの争奪戦に興じる子どもたちの声が入り込んでくる。この二、三日の街の第一小学校と第二小学校の攻防戦は一進一退で、決着していない。

「だけど、魔法が効かないなんていう評判がどうして立ってしまったのさ。これまで、一度だって、効果が無かった魔法なんてないだろう？」

「まったく効かなかったというのは、ない」

「だろ？」

「だれかが魔法でもかけたかな」

「気配でもあるのか？」

「ない」

「あー、春だというのに、綺麗なドレスをきることもできないなんて、ついてない。耕太郎、おまえ貧乏神にとりかれたんじゃないのか」

この冬はお客が少なくて、魔男は「魔法食」の依頼人の感謝の念がこもったドーナツが手に入らず、米を食べてすごした。魔法の力が弱まると言いながら、あまり食べすぎて太りすぎた。

春先になって、依頼人が現れ、米食の影響もなく無事に仕事もすませた。なの

に——である。

「貧乏神というのは、妖精みたいなものか？」

「ばかだね、あんな貧乏臭い妖精がいるもんか!!」

「あんなっていうことは、会ったことがあるのか」

「あるさ」

光子はそのときのことを思い出して身震いした。

三週間ほど前のことだった——。

魔男のおつかいで街にでたときにぼったりとあったのだ。貧乏神も自分のことが見えるモノがいるということに気がついてうろたえていた。

「いや、すまん。汚いなりで。これが制服なものだから」

そういった貧乏神がヒョイとつまみあげた裳裾からは泥だらけ裸足が覗き、身体中から漂ようというよりも湧き出してくる、えもいわれぬ臭気が光子を包ん

だ。慌てて鼻をつまんだが遅かった。

「みたところ、あんたは同業者ではない様だから、これからよろしく頼む。じゃ、急いでいるもので、これで失礼する」

貧乏神はそういうと街の人込みに紛れていった——といっても充分に目立っていた。なにせ、出会う人出会う人を覗きこみ、肩に乗っては乗り心地を確かめている。乗られた人間は気がついていないようだった。

「ちよつと！ あんた、名前はなんて言うのさ」

光子は余計なことを聞いてしまったようだ。貧乏神が目の前にすっ飛んできて、再び貧乏臭に包まれてしまった。

「おおおおおー！！ 感動じゃ！！ こんな貧乏臭い街で、わしの名前を尋ねる人間に会うとは！！ いや、あんたは人間じゃないな。まったく貧乏臭くない」

「はにゃへにゃ？」

光子は鼻をつまんで名前を聞いた。早いところ名前を聞き出して、あっちで

行つて欲しい一心だった。

「わしの名前は、向山幸太郎。しばらくこの街にいるからよろしく頼む。おまえさんはなんという？ ひつこ？ いつこ？ ええい、鼻をつまんでいる指を離さんか!!」

「みつこ、だよ。臭いからあっち行つてくれよ。アタイのドレスにあんたの匂いがつくじゃないか!! 貧乏臭い妖精なんて絵にならないだろうが」

「妖精なのかい、あんた。どうりで綺麗だと思つたよ」

光子は綺麗とか美しいと言うことばに敏感に反応する。貧乏臭いことも忘れて、ちよつと照れている間に、貧乏神は、乗り心地の良い人間を見つけて行つてしまった。

後に一人残された光子を行き交う人が避けるように遠巻きにやりすごしていく。光子は自分が美人だからか皆がジロジロ見るのかと思つたが、貧乏神との会話が、貧乏神が見えない人間には、気味悪く思えたただだと気がつく、ごまか

すように鼻歌を歌いだした。

「そりゃ、光子、貧乏神は俺にとりついたんじゃないかって、おまにえにとりついたんじゃないのか？」

魔男に言われて光子は口を尖らせた。

「あいつのせいかな？ 街中が貧乏臭くなって、貧乏地味ちゃって、魔法使いに仕事をたのむどころじゃなくなっただけか？ 耕太郎、貧乏は魔法じゃ直らないのか？」

「いま、わしの名をよんだか？」

目の前にいきなり貧乏神が現れたので、光子は驚いた。

「なるほど、こりゃ臭いな」

魔男はつぶやいた。

「おや、ここにもわしが見える人間がいる。おまけに本物の人間だ」

貧乏神は魔男を珍しそうに眺めている。

「誰も、あんたなんか呼んじやないよ。耕太郎ってのは、この人の名前だよ。そういや、あんたも幸太郎だったね」

「なんだ。紛らわしいのお」

「それはこっちの言うセリフだよ」

「ところで、貧乏がどうしたこうしたと言っていたようだが、なにかお困りか？
貧乏のことならわしにまかせなさい。なにせ歩く貧乏だから、知らないことはない」

貧乏神はそういうと椅子に腰掛けた。居座るつもりらしい。

「貧乏神さん——えーっと、向山幸太郎さんでしたっけ？ 向山さんは、街にはしばらく滞在するんですか？」

「なんだか貧乏臭い街でな、まったく貧乏神を敬うということを知らないんだな。まったく、現代人ときたら禍福はあざなえる縄の如しということを知らない

と見える。わしを敬えば、富みを得るということをしらん。誉めてもらえば嬉しいのは、神も人もおなじだということなのになあ」

「まあ、しかたないです。目に見える魔法使いの私だって苦勞しているんですから。ところで、ご相談なんですけど——」

えー、ネズミの文蔵です。魔男さんはとんでもないことを言いだしました。貧乏神に自分のところにしばらく滞在するように頼んだです。これ以上貧乏になつてどうするんでしょうか？ 貧乏神さんも自分の姿が見える人間、と話が出るのがうれしらしく、二つ返事で話は決まりました。霊媒などと自称するものも、生き霊のなれの果ては見えるんだそうですが、神は見えないからだそうですね。

ともかく、貧乏神さんは、魔男さんの部屋に居候することになりました。

さて——。

「いやあ、こんなに歓迎してもらって申し訳ない」

貧乏神こと向山幸太郎は目の前の食事から立ち上る香りをクンクンと嗅いでいる。居候する以上身奇麗にして欲しいという魔男のたつての願いを聞き入れ、貧乏神は風呂に入りさっぱりとしている。制服である檻褌も洗濯し、魔男の部屋の部屋の軒下でひなたぼこしている最中である。

目の前で魔男の服を着ている貧乏神は、得体が知れないものの楽しそうな人生を送っているような中年男に見えた。つまるところ魔男と同類である。

「向山さんはいつから貧乏神をお勤めになつているんですか？」

魔男は、貧乏暇なしといった風情でせつせと食い物を口に運んでいる貧乏神に聞いた。

「生まれた時から」

「ずーっと？」

「ずーっとじゃ」

「失礼ですが、ご実家は貧乏だった？」

「なんの、裕福——というより、すごい金持ちだ。なにせ皆を貧乏にして財宝を巻き上げるんだから、貧しいわけがないだろう。ちょっと発想を転換して貧乏神を敬って供え物をしてくれる人間を喜ばせたところで、びくともしない。神の境界といってもおまえさんは知らんだろうが、あの世界で一番の土地持ちだし、毎年、長者番付けの常連だ」

「へえ。ちなみに一番はどなたですか？ 弁天様？」

「弁天？ ああ、サラスバティか。あいつはたいしたことない。小銭はじゃらじゃらさせているがな。おまえさんは七福神のことを言いたいんだろうが、あいつらはみんなたいしたことない。だから、毎年、正月に船に乗って出稼ぎにくるんだ」

魔男は軒下ではためく檻樓を見た。洗っても檻樓は檻樓。臭いがなくなったのがせめてものちがいだ。すすぎ水が綺麗になるまで四回も洗濯機を回すはめに

なった。それでも、白くはならず、日に焼けた灰色になっただけだった。

「あ、それじゃ、福の神でしょう?」

向山は顔を上げずに箸だけ振って見せた。違うらしい。

「あー食った食った。ごちそうさん。光子さん、お茶を一杯恵んでもらえんかのぉ」

向山は光子の入れたお茶で口の中を注ぐと、旨そうに飲み干した。

「あのなあ、福の神ってのは、つまり、わしのことだ。一人二役だな」

「そういえば、貧乏神を接待すると福をもたらすとかなんとかおっしゃってましたね」

「そういうこと」

「どの程度、お接待をすればいいんでしょうか?」

「気分だな。お茶一杯で転じるときもあれば、財宝を山のように積まれたところでだめなときもある」

「さすが神様ですね。わがままだ」

「なにも、人を貧乏にするのを楽しんでるわけじゃないぞ。というよりも、わし人間を貧乏にするわけではない。それは大いなる誤解だ。わしは、目印みたいなもんだ。この人は貧乏です。それもかなりタチの悪い貧乏です。近寄らないほうがいいですよと、世間様に知らせる広告塔みたいなもんだな」

「そうなんですか。知りませんでした」

「だから福の神なんだよ。教えてもらってありがとうと感謝されれば、なにかしてやりたくなる。なんせ、わしはお大尽で太っ腹だからな。ああ腹一杯になったら猛烈に眠くなってきたあ。ここんところ働き過ぎだったからなア」

「どうぞ遠慮なく、そのこのベッドを使ってください」

向山は遠慮せずに魔男のベッドに横になると、軒を立てはじめてしまった。

「おい、耕太郎」

貧乏神の軒が止まないことを確かめると光子が声を低くして言った。はしたな

いことに、手にした箸を魔男の鼻先でくるくる回している。

「お前の魂胆が読めたぞ。貧乏神を接待して福の神に転じてもらって、貧乏を脱出するつもりだろう。甘い^二 食われるだけ食われてポイだぞ。ますます貧乏になるだけだ、やめとけ。いま、この街で一番の貧乏はおまえなんだぞ」

「そんなことは考えていなかったよ」

「じゃ、どうするつもりだ。まさか、あんまりお客が来ないんで寂しくなって話し相手が欲しくなったわけじゃないだろう」

「ああ、話し相手は口うるさい妖精一人でまにあっている」

「なんだと^二」

「光子、飯を食ったら、町へ出かけて、貧乏人を探して、連れて来い。ドーナツを買う金がなければ貸してやれ」

「なにを考えているんだ」

「なんでもいいからさっさと行って来い。貧乏神が起きないうちに。ま、当分は

寝ているだろうが」

「魔男、まさか睡眠薬を入れたのか？　おかしいと思ったんだ。だけど、神様に睡眠薬なんて効くのか？」

「効いているみたいだ」

「神をも怖れぬ奴だな、お前。祟られるぞ」

「つべこべいわずに行け」

「買い物はいいのか」

「今回はない」

それを聞いた光子は妖精の姿に戻り、ガラス窓を通り抜けて部屋を出ていった。

えー、ネズミの文蔵です。お邪魔します。

魔男さんは魔法使いです。その魔法は、光や色のエネルギーを集めて利用しま

す。そのエネルギーは一旦、光子の身体に集められるのですが、それは、光子のドレスとして出現するのですな。

色や光は、植物や鉱物から取り出します。魔法に使う素材を集めるために、いつもは魔法を行う前に光子を買い物にいかせます。だから、光子は買い物はないかと言ったわけですね。

ちなみに、買い物の中に汚い色のものや得体の知れないものがあると光子は酷く機嫌が悪くなります。ドレスのしあがり汚くなるからです。

さて――。

街に出た光子は貧乏人を探し始めた。目印の貧乏神は魔男の部屋で寝ているのだから当てにならない。

「貧乏人が集まる場所なんてあるわけないし、名札をつけているわけないし、おーいと呼んでみたところでねえ。はあー」

光子は人通りの多い道傍の街灯の上に座って行き交う人を見下ろした。

「どうしたい？　ため息なんかついてさ」

目の前に正之助が浮かんでいた。この街を担当している愛のキューピッドだ。キューピッドといえばちよつとムツチリとしてかわいもんだが、目の前の正之助は明らかに太りすぎ。ムツチリはなくてムチムチのパンパン。ニュートンが宙に浮かぶ正之助を見たら氣を失うに違いない。

正之助は光子の目の前で、つがえた矢をピュンと放った。

「ちえっ!!　外れた」

「相変わらず腕が悪いね」

「ふん、放っておいてくれ。おれがまじめに仕事したら、この街は結婚、出産ラッシュになってしまう。テキストで良いんだよテキストで。そんなことよりどうしたい湿氣た顔して」

「貧乏人を探しているんだよ、それも極めつけのさ」

「それなら貧乏神をさがせばいいじゃないか」

「あいつなら、うちにいるよ」

「あれま。最近景気が悪いとは噂に聞いてたが、そこまで落ちこんでいるのか？ あんな中途半端なマードーフなんか見限って、妖精界に戻ったほうがいいんじゃないか」

「貧乏神は取りついているわけじゃなくて、客分としているんだよ。いまは睡眠薬で眠らされているけど」

「え？ なんだって？」

「なんでもないよ。正之助、貧乏人を知らないかい」

「貧乏神がだめなら、死に神に聞いてみちやどうだい。死ぬほど貧乏している人間のリストぐらい持っているだろう」

「昇太の奴かあ。教えてくれるかな？ 個人情報取り扱いには厳しくなってるからな」

「大丈夫だ、あいつ、おまえさんにホの字だから。光子の頼みなら、たとえまリストに名前が一個もなくとも、慌てて書き込むに違いない」

「貧乏神に死に神かあ、なんて嫌な日なんだろう。どこにいるんだい昇太は」

光子は街灯の上に立ちあがり町を見まわした。めざす目印は川辺のほうにすぐに見つかった。

「いた、いた」

「ま、頑張れよ」

光子は目印——空に上る光の回廊——を指して飛んでいく。

光の回廊に近づくと、まさに死に神の昇太が人間の手を引いて天を目指して登ってきたところだった。昇太は燕尾服に白手袋、シルクハットという出で立だ。死に神の制服だ。

「おい、昇太」

声をかけられた死に神はギョツとして手を離してしまった。驚くのも当然だ、

自分の姿が見える人間などいるはずがないのだから。

気持ちよさそうに天を目指していた人間はギャーと喚いて落ちて行った。人間の体が屋根にスツと消えると、「あなたー、よかった」「お父さんが生きかえった」「奇跡だ」という声が聞こえた。どうやら生きかえったようだ。

「なんだよ、失敗しちゃったじゃないか。あーあ」

「うるさいね、あとでまた連れて行けば良いじゃないさ」

「タイミングが悪すぎる。もうすこし早ければ良かったが、ここまで連れてきたのが、生きかえると、全部まっさらになってしまうんだぞ。病気は消える、寿命は延びる。おまけにドタキャンは違約金を取られるんだ。またノルマが増える」
死に神の昇太は恨めしげに足もとの家を見つめた。

「今度デートしてやるから忘れろ」

「忘れる!!」

光子に言われた昇太は二つ返事で答えた。

「だから、手伝え」

光子に仕事を邪魔されたお詫びのデートに条件を出されたことに、昇太は矛盾を感じていない。感じる暇などないほど舞いあがっていた。

「うん、手伝う」

「よし」

従順な飼い犬のようである。

「貧乏人を教えろ」

言われた昇太は素直に燕尾服のポケットから手帳を取り出すとめくり始める。

光子は見ってしまった。リストの中に魔男耕太郎の名前を。ただし、日付けが書いていなかったところを見ると今すぐと言うわけではないのだろう。すくなくとも今の貧乏が原因で死ぬことはないということだ。ほんの少し安心して死因の欄に目をやる。「光子……」

「こら、覗くな!!」

「おい、耕太郎はなにが原因で死ぬんだ？」

「教えられない」

「教えろ」

「だめ」

「じゃあ、デートはキャンセルだ」

「それでもだめだ。それにキャンセルしたら、貧乏人を教えない」

光子は昇太を睨みつけた。昇太は顔を真っ赤にしてもじもじしている。照れる死に神なんて見られたもんじゃない。

「教えろ」

「だからダメだって言っているだろう」

「そうじゃない、貧乏人だ」

光子はいまの仕事を優先することにした。耕太郎の死因はデートのときに聞き出せば言い。充分間に合う。

「あ。五丁目のオーロラ荘四号室の高橋秀仁だよ」

「そいつは貧乏か？」

「ああ、貧乏神もさじを投げたからね。だけど、当分死なない」

「ありがとう昇太、礼を言う」

「そ、そんなあ。光子さんの役に立てれば。デートはいつにする？」

「そのうちな。また、連絡する」

光子はオーロラ荘を指指して飛んだ。昇太はお腹の前で小さく手を振りながら見送っている。

オーロラ荘はおんぼろ荘の間違いではないかと思うほどのありさまだ。瓦はところどころ欠けているし、ひびの入っていない窓は一つとしてない。壁の塗装は剥げもやもやとした模様を描いている。階段は錆ているし、雨樋はみな外れている。

光子は窓にへばりついて部屋の中を覗いた。窓ガラスは汚れて曇っているし部

屋の中も暗くて良く見えない。

「人の気配がしないんだけど」

「あれ、おかしいなあ」

昇太が光子の隣で手帳を覗きこんでいる。

「わ！　どこから現れた！」

「人をゴキブリみたいにいわないですよ。おかしんだよ。高橋さんはさっき見たときには死なないはずだったんだけど、今は」

昇太がさしだした手帳には「高橋秀仁　死因・首括り」と文字が浮き出ている。

「なに!?　死んだのか？」

「まだでしょう。確定のマークが出てないから。天界で審議中だと思うよ。これだから嫌になるんだ、人間は。僕がいくまでおとなしく待っていれば良いのさ。間に合わないとかボクの業績にならないんだから」

ぼやいている昇太を置き去りにして、光子はあわててガラス窓を通りぬけた。

曇っていたからちよつと苦勞した。光子は曇りガラスやレースのカーテンなど、半透明のものが苦手だ。

「こら！　まて！！」

光子はいすの上に立ちあがって首に縄をかけている男の耳元で叫んだ。

「止めるな、死なせてくれ」

男は声をかけられたことを不思議にも思わずに答えた。

「あとでゆっくり死なせてやるから、いまは待て。どっちみち天界で審議中だから時間はある」

男の顔の反対側で昇太は「その通り」とうなずく。

「はん？」

自分を止める声の不思議さにようやく気がついた男は、顔を左右に振って声の主を探す。

「誰だ？」

「死に神だよ。死なせてやるから、ドーナツを買って、櫛の木屋敷へ行くんだ」
「ドーナツ？　櫛の木屋敷？」

「そうだよ。金がないならホラ」

光子が手を一振りすると、何もないテーブルの上に小銭がチャリンと現れた。
「ああ、久しぶりに聞く小銭の響き。いいなあ。やっぱりお金は硬貨に限る。お札じゃ、こうはいかないよね」

男は目を閉じて夢見る漫画の主人公のように心持ち顔を天井に向けてつぶやいた。

えー、ネズミの文蔵です。たびたびのお邪魔失礼さんです。

この高橋と言う男、なんで貧乏かと言いますと、働かないからです。およそ労働ということに興味がありません。福祉を受けると言う労働さえ厭うんですから、貧乏で当たりまえです。たまに働くこともあるんですが、すぐに「こんなの

は女子どものやることだ」とか「給料が安過ぎる」などといって辞めてしまうんですから、始末が悪い。

これまで生きてきたのが不思議なくらいですが、親の遺産が僅かにあったんですな。それもついに底をついた。だから、死のうとしていたというわけです。

ある意味見上げた心意気ですが、およそ非生産的、非創造的な人間です。

天界が受け入れたものかどうか審議するのも当然です。

さて――。

男はドーナツを二つ買うと檜の木屋敷を目指して坂を登り始めた。坂の上の檜の木屋敷のことは知っていた。だが、行ったこともなければ行こうと思ったこともない。当然、道など知るはずもないのだが、一度も迷わず坂の登り口にたどり着いた。

一週間余り水以外なにも口にしていない男にとって、坂道は長く辛いものだった。

た。男は手にしたドーナツを口にしようとは思わなかった。食べてしまっただめだ。なぜか、食べたらずねない、という思いがそうさせた。

途中、気を失いそうになるほどのめまいにたびたび襲われながらもようやく坂を登り切った。

折りから吹きはじめた風が檜の木をなぶる度に、葉がいつせいに笑っている。何も食べていないのに汗だけは出てくる、と不思議に思いながら目の前のアパートを見上げた。

「ドーナツ荘？　ボロイなあ」

自分の暮らしているアパートのことは棚に上げている。

「おい、着いたぞ。この先、どこに行くんだ？」

男は宙に向かってつぶやいた。

「アパートに入って二階に上がればわかるよ」

光子は男の耳元に囁きかけると部屋に先回りした。魔男の部屋の窓ガラスに溶

けるように消えた光子をあわてて昇太も追いかけて窓ガラスにぶち当たって頭を押さえている。死に神の出入り口は屋根からという決まりになっている。ブツブツ言いながら屋根に上がっていく。

「来たのか」

部屋のなかでは魔法使いの正装に身を飾った魔男がドアの前に仁王立ちしている。

「ああ。極め付きの貧乏人だぞお」

光子が魔男の肩にちょこんと座った。

「僕が見つけたんだよ」

「あん？」

魔男が声のするほうを見上げると、燕尾服姿の男が半分だけ天井から生えていた。

「耕太郎、紹介する。この街を担当している死に神の昇太だ」

「よろしく」

昇太は天井にぶら下がったままシルクハットを脱いで挨拶した。

「死に神によろしくといわれたときにはなんと答えればいいんだい」

「あ、気にしないで下さい。そのときが来たら改めてお迎えにきますから。どうぞ、お仕事をお続けください」

ドアがそつと叩かれた。魔男が右の人差し指をヒョイと動かすとすうっとドアが開く。

「あ、ども」

貧乏しているわりには、体格の良い男が立っていた。窮屈そうな猫背の上にはほんとした顔が乗っている。その顔の真ん中にある厚ぼったいまぶたの目をすぼめがちにして目の前に立っている男を眺めていた。

「いやーいらっしゃい。ようこそおいでくださいました」

魔男はいつになく機嫌よく声をかけた。

えー、ネズミの文蔵です。邪魔するな？ 重々承知の助座衛門なんですが、このまま流すと、魔男さんの正装の説明ができません。

魔法使いの魔男さんの正装は白タイツ姿に虹色マントです。相当にけったいな風体です。どうみてもサーカスのピエロにしか見えません。本人も恥ずかしいと見えて、部屋の外へは絶対に出て行きません。

これで、男が目をすばめて魔男さんを眺めていた理由がおわかりになったでしょう。

そう、なんだこりゃ？ という格好なんです。

さて――。

部屋に招き入れられた男はテーブルの向こうにいる得体の知れない男をしげしげと見た。冴えない中年男。怪しいというよりもアブナイ風体。肩の上には変な人

形まで置いている。

「あの？」

「はい、わかってますよ、高橋さん。全部わかってます。私に任せてください」
「え？ 任せるってなにをですか」

「貧乏脱出です。私がなんとかします。さあ、どうぞこちらにおかけ下さい。ところで、お願いしたモノはお持ちいただけましたでしょうか」

魔男はいつになく丁寧に話しかける。

「これですか？」

男はポケットからドーナツを取り出した。

「けっこうけっこう、おいに結構です」

魔男は受け取ったドーナツをテーブルの真ん中に置いた。男はじいっとドーナツを見ている。

「ところで、高橋さんは、私が魔法使いだということはご存知ですか」

「は？　いいえ。魔法使い？」

「けっこうけっこうますます結構です」

「では、改めてお尋ねしますが、あなたは魔法使いを信じますか？」

突然現れた自称魔法使いの白タイツ男を信じろというほうが無理だが、信じないという、何をされるかわからないという恐怖に負けた男は小さな声で「はい」と答えた。

「ふふふ、結構です。高橋さんそれではドーナツを持ってください。食べちゃだめですよ。さあ、光子さん、いつもの場所へ」

「なんだよお、今日の耕太郎は気味悪いぞ」

男は、白タイツ男の方にくつついていたしゃべる人形が重量の法則に逆らうようにドーナツの下に舞い降りてくるのをじっと見た。しかも人形の声は自殺しようとした男を止めたときに耳元で囁いた声に似ていた。

「あの一。これはなんですか？」

男は、ドーナツの下に立つ光子をしげしげと見つめながら言った。半透明の妖精服は身体のラインが透けて見えるから、なかなか悩ましい姿ではある。

「妖精です。あなたを貧乏から救い出す妖精です。ちなみに天井から半分身体を出しているのが、自殺しようとしたあなたを迎えに行った死に神さんで、あっちのベッドで寝ているのが、あなたを貧乏のズンドコに落とした貧乏神さんです」男は「見るな、すけべ」と光子に言われて慌てて天井を見上げたものの、目があった死に神の昇太に「やあ、ども」と言われ、慌てて目をそらし、もう絶対に余所見をするまいと、魔男を見つめた。ベッドの上の貧乏神が残っていたが、目の前の白タイツ男を見ているのが一番安全だと判断したようだ。

「さ、それでは魔法を行います」

魔男はマントの下から取り出した貧乏神の檻樓の切れ端をドーナツの上にかざした。

ドーナツの下では光子が顔を引きつらせている。

「この檻樓をドーナツの穴に通すときに貧乏退散！ と念じてください。よろしいですか」

男はこくりとうなづいた。

えー、ネズミの文蔵です。お邪魔するのも(きつと……たぶん)これが最後です。お許し下さい。

この貧乏男、妖精光子の姿が見えたということは、意外に純真なのかもしれません。

それはさておき、魔男さんのお使いになるのは、光を集めて願いをかなえる、光の色が持つ意味、エネルギーを利用する魔法ですが、常人にはなかなか理解できないものがありますな。

以前、魔男さんが光子にした説明によれば、「光は粒子、つまりは物質。物質を集めてそのエネルギーを使うのだから、サイエンスなのだ!! まじないの類い

ではない!!」というこたらしいです。

どうして光のエネルギーを集める道具がドーナツなのかというと、ドーナツが大好きだから!!　ということもあるんですが、魔男さんによれば「ドーナツの穴は、そこに何も無いわけじゃない。ドーナツがあつてはじめて存在する穴、逆もまた真であり、穴があつてドーナツが存在する。穴は確かに存在する空間なのだ。ドーナツを食べると言うことは、その空間も食すということ。何もないところ空間を作り出すドーナツこそ、光の持つエネルギーを顕在化させるにふさわしい道具なのだ!!」というらしいですな。

集めた光をドーナツの穴に通す。通すことで光のエネルギーが目に見える物体になつて、それを使って人に影響を与えるのだというのが、魔男耕太郎の説明です。目に見える物体というのはこの場合、妖精の光子のドレスとなつて出現します。綺麗な光なら綺麗なドレスが生まれるのは当然ですが、今日の素材は貧乏神さんの檻樓です。光子が顔を引きつらせるのも分かりますな。

もし、魔男さんの魔法についてさらに詳しく知りたい方は、ドーナツを手土産に檜の木屋敷までどうぞ。もったも、そうした奇特な方は、私が知る限りこれまで一人もおられません。

さて――。

男が見つめる前で襪襦布はドーナツの穴に消えた。男は自分が持っているドーナツを心持ち持ち上げて穴の底(?)をみたが、切れ端ものぞいていない。

代わりに先ほどまで透き通るピンクのドレスを身にまとった光子がいまはねずみ色に変わっていた。重力に素直に垂れ下がる服は別に濡れているわけではなく、繊維が延びきってしまったているからだ。肩の当たりのほつれをピュッと抜いたらぱらぱらとほどけてしまいうさそうだ。裾は刷り切れ、ところどころ接ぎがあるのは当然だが、腰にはつれた荒縄がしまっている。

「ちえっ、やあーな予感がしたんだよ。まったく。貧乏臭い」

「当然だ、貧乏神なんだから。さ、これで終わりです。ご苦労様でした。お帰り
いただいて結構です」

男は自分の貧乏が治ったかどうか確かめるように自分の腹のあたりを見下ろした。夢かもしれないと思い天井を見上げれば死に神がこっちを見ているし、ベッドでは貧乏神が寝ている。

「ばかか、こいつ。貧乏が治ったら、いきなりパリッとしたスーツでも着ている
と思ったんだろうか」

「え、なにかおっしゃいましたか」

「いえいえなんにも。それでは仕上げにこの人形をもってお帰りください。部屋
の入り口に置いて下さい」

「貧乏除けの人形ですか」

「ま、そんなもんです。では」

魔男はドアを開けると男を促した。男はわけがわからないままに部屋を出て行

く。光子は貧乏臭い服を脱ぎたいばかりに「早くしろ」と男をせかしている。

魔男はドーナツを口に放りこむと貧乏神の隣に横になった。

ドーナツはなんとなくかび臭い味がした。

男は光子をアパートの部屋のドア前に置いた。

「拝め！ 心を込めて拝め！」

光子は黙って部屋に入ろうとする男に声をかけた。

「労働を惜しむな。出し惜しみするから貧乏から抜け出せないんだ」

男は光子に言われるままに拝んだ。

「ビンボウタイサン！ オンマニペメフグ！ エエイツ！！」

「よし。部屋に入ってクソして寝ろ！！ あ、その前に窓ガラスを磨くんだ。いいか!？」

いやはやとんでもない妖精もいたもんだと思いつつも、男は部屋に入ると、窓

ガラスに息を吹きかけ磨いてから、素直にクソをして寝た。

部屋の中が静まると光子は檻樓をなびかせながら宙に舞い上がり、男が磨いた窓から部屋に入った。

「やあ、ご苦労さん」

天井から顔を出しているのは、死に神の昇太だ。

「なんだ、おまえついてきたのか？」

「まだ、ボクのノートからこいつの名前が消えたわけじゃないから」

「ふん、仕事熱心な奴だな。邪魔するなよ」

光子はそういうと、小汚い布団を被って寝ている男のからだの上を舞い飛んだ。

光子の身体から、換気扇を洗ったときの汚水のような色の光がポトポトと落ち、男のからだにすうっと吸い込まれていく。

光の最後の一滴が男の口に吸い込まれたときには、光子の身体は元の半透明に

戻っていた。

「今回ばかりは耕太郎の考えていることが理解できない。ま、汚い襦袢を脱ぐことが出来て清々した。さ、帰ろう」

光子が窓ガラスを抜けて出ていったとき、うつそりと目を開けた男は、天井から死に神がすっと消えるのを見たような気がした。

「お帰り」

光子を魔男が迎えた。魔男の向かいには貧乏神が座って茶を飲んでいる。

「目が覚めたのか、じいさん」

「ああ、何百年ぶりかで良く寝たよ。ほんとうに貧乏暇無しじゃったからな」

貧乏神はさっぱりとした顔付きで言った。食事に睡眠薬をしこまれたなどとは露とも疑っていないようすだ。

「おまけに襦袢まで洗濯までもうて、ありがたい。なにかお礼をしなく

「ちゃんならんなあ」

「そんなことは必要ないです。もう充分お礼はしてもらいました」

魔男はちよっぴりにやっとながら言う。

「は？　　どういうことかな？」

「ま、いいじゃないですか。お茶をもう一杯いかがです？」

数日後、魔男がモーニングコーヒーを貧乏神と差し向かいで飲んでいると、アパートの外から、「まおとこさぁーん。郵便ですよ」という、息を切らせた声が入ってきた。久しぶりに聞く郵便配達の声だった。魔男は「部屋まで届けろ」と怒鳴った。

街で唯一人、櫛の木屋敷を憎んでいる郵便配達はブツブツ言いながら部屋の前までくるとドアを開けて郵便の束をさしだした。

「随分と久しぶりだが、おまえ、ここまで坂を登ってくるのがいやで溜めこんで

いたんじゃないのか」

「そんなことはないですよ。ちゃんと消し印を見てくださいよ」

たしかに、昨日の消印ばかりだ。

魔男が手紙中に何通か「まおとこさま」という宛名があるのをみつけて顔をしかめている間、郵便配達は初めて見る魔男の部屋を珍しそうに眺めている。だが、コーヒーを飲んでいる貧乏神の姿も天井から鍾乳石のように身体半分突き出している死に神の昇太の姿も、部屋の中をひらひらと舞っている光子の姿も見えないようだ。

「お客さんですか？」

郵便配達はテーブルの上で湯氣を立てている二つのコーヒークップを見ながら言った。

「ああ、今この街の神々と懇談しているところだ」

魔男がまじめくさってというと、郵便配達はあざ笑う様に唇の端をチョイと上げ

た。

「それはご苦勞様です。ここところ、街も景氣が悪いんでよろしく伝えてください」

狂人に逆らうのは危険だとばかりに頭を深々と下げる。

「うむ、わかった。おまえさんもまじめに勤めに励むように。さすればきつといふことがあるう」

あくまでもまじめな魔男の言いように郵便配達はついに笑い出した。そして、もういちど部屋のなかに顔をつっ込むと、「神様、よろしく頼みますよ。給料上げてください!! 恋人もください」と大声で叫んだ。

郵便配達は誰もいないはずのテーブルのコーヒークップが返事をするように「とん」と置かれたような氣がしたが、氣のせいだと決め付けて「それじゃ、まあとこさん」といつてアパートから出ていった。

外に出た郵便配達は魔男の部屋を見上げて苦笑いをしている。

「へ？　なにが神様の懇談会だ！！　やっぱりおかしいよ、ここの人」

魔男に手紙をたくさん届けた割りに軽くないバッグを肩に掛けなおすと街に向かつて坂を降りて行った。

魔男と光子、そして死に神の昇太が、小さくなつて行く郵便配達を部屋の窓から見送った。

「貧乏神は帰ったんだな」

光子が言った。

「ああ」

そのとき貧乏神を肩車した郵便配達が角を曲がつて消えた。

「どうだ、耕太郎。仕事の話はきたか？」

「うーん、うーん」

「どうした？　腹でも痛いのか？」

光子は昇太のノートのことを突然思い出して心配になった。キツと顔を天井に

向けると、昇太が「へ？」と言うような顔をしている。光子の心配がわかったのかノートを取り出すと顔を振った。光子はさつとそのノートを奪い取った。

「魔男耕太郎、光子の……ボクの愛しい光子さんの愛人？　ボクの恋敵二」

「どういふことだこれは？」

光子は昇太を睨んで怒鳴った。昇太は首まで天井に引っ込んだ。

「紛らわしいことを書くな!!」

「なにを騒いでいるんだおまえら？　うるさいぞ」

えー、ごめんなさいよ、ネズミの文蔵です。もう、やめようと思ったんですが、でてきちゃいました。

魔男さんは郵便の封を次々と開けては、まだ唸っています。

手紙に書かれた依頼の内容は「しつこい、おねしょを直して(二〇歳の男)」とか、「宿六の酈を治して(四五主婦)」とか、「頑固な肩凝りを治してくれ(一八歳

高校生」 あげくは「水虫を治してくれ(五三歳自営業)」なんてものばかりだったんですな。

魔男さんは「おれはまじない師じゃなくて、魔法使いなんだけどなア」などつつぶやいております。

さて――。

「お、この大きい箱はなんだ？」

光子が最後に残った郵便を指して言う。差し出し人は「高橋秀仁」とある。

「あの貧乏男か？」

箱の中にはドーナツがぎっしりと入っていた。魔男は何のためらいもなく一つつまんで口に放り込むと、添えられていた手紙を読み始めた。

「拝啓 魔男耕太郎様 過日は私の貧乏を治していただき誠にありがとうございます
ました。まだ、貧乏が完治したわけではありませんが、貧乏暇無しの言葉通り、

日夜額に汗して働いております。街のものにも『おまえの頑固な貧乏がなおるなんて』と驚かれたり感心されたりです。そのたびに『檜の木屋敷の魔男さんがお治し下さった』と宣伝にあい努めております（ご迷惑でなければいいのですが）。街のものにきいたところ、お礼はドーナツで良いとのこと、本来ならばお礼の品を持参すべきところなれど、かような次第で暇もなく郵便にて失礼いたします。ご笑納くださいませ。ありがとうございましたうんぬんかんぬん」

「なおったのか、あの貧乏が？　ていうか、貧乏って病氣か？　それで、水虫だの肩凝り治療依頼が舞い込んだんだな」

「そういうことらしい」

魔男は二つの目のドーナツに手を伸ばしながら言った。

「だいたい、今回の魔法のしかけがよくわからん」

「仕掛けとは失礼だぞ、光子。それにしても、なんだ、わかってなかったのか？　簡単なことだ。貧乏神のエキスの染みこんだ檻樓の一片から貧乏魂を取りだ

し、貧乏暇なし状態の貧乏神さんにはんの少し暇をやる。その分をあの男に分ける。あのぐうたら男が働くようになったのは、私の魔法のせいだということになる。当然、私の仕事が増える。風が吹けば桶屋が儲かる」

「なんだか、かなり無理があるような気がするぞ、耕太郎。だから変な依頼ばかりくるんだ」

「ま、いいさ、ようするに最初からやり直しということだろう」

魔男は三つ目のドーナツを口に放りこむと、最初の依頼（おねしよの治療）に取りかかるべく「魔男ノート」を繰り始めた。

えー、文蔵です。ごめんなさい、またでてきちゃいました。

魔男さんはごらんのように、依頼を断るということをしません。先様が魔男さんの風体を見て断るということはママあるんですがね。そういうわけで、魔法使いを名乗り始めた頃の魔男さんの仕事ときたら、行方不明の猫探しとか、失せも

の探しばかりでした。なかには電車の中の置き忘れたばーあさんの遺骨を探してくれなんてのもありました。

ところで、郵便配達は「まおとこ」と呼んでいましたが、正確には「まだん」です。本当の姓はわたしも存じ上げません。なんで、そんな名乗りをあげているかというところ。長くなるのでやめましょう。ま、そうとでも名乗らないと魔法使いに見えないということです。もっとも名乗ったところで同じなんですけどねえ。

さて――。

「光子、仕事だ」

魔男が魔法に使う買い物リストを光子に渡した。

葡萄染（えびぞめ）の重ね目色の着物姿の光子は、メモ受け取り街に出ていった。歩く度、裾に染め抜いた重く頭を垂れる黄金色の稲穂が揺れていた。（完）

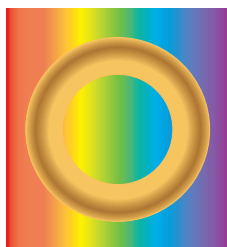
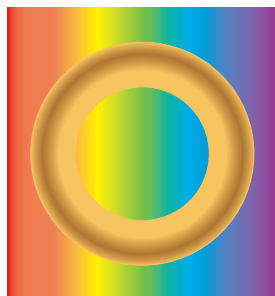
魔男耕太郎 4 色使いの魔法使い

2004年5月20日 初版発行

著者 ぶんろく

発行 Bunroku's Factory

© Bunroku 2004



Bunroku's Factory 魔男
耕太郎4ぶんろく
色 使 い の 魔 法 使 い
